
過去の夢の計画

架空奇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去の夢の計画

【Nコード】

N9533Y

【作者名】

架空奇人

【あらすじ】

過去の夢であった計画を大人になってから実行する話。

人物紹介

有川竜【俺】 税理士

工藤海斗【工藤】 電気屋

佐藤真【しんちゃん】 ゲーム関係

佐久間孝太【さくちゃん】 ゲーム関係

間藤陸【まっと】 警備員

西山翼【にしっぺ】 大企業の社長

菊地優【きつく】 TVディレクター

水本空【水本】 大企業の社長

西田晃【西田】 アイデア売り

大倉政【あにい】 フリーター

吉野岳【吉野】 柔道家

高橋元気【げんちゃん】 警備員

吉澤亮【吉澤】 アイデア売り

林淳希【あつき】 芸能人

大泉光【ズミ】 不明

川崎笑 OL

佐々木愛美 ピアニスト

人物紹介（後書き）

細かい設定は話の中から読みとっていただければ、と思います。

過去

俺は北海道の中学生だった。入学したのは20年前だっただろうか。男子といつもバカをやつて、始業時間になつても座つてなかつたりするのは良くあつた。だが、不真面目だった訳ではない。成績は学年で15番目くらい。120人いたから結構いい方だろう。一番の思い出は中2だった。

一番大きな思い出というようなものではないが、今一番印象に残っているのは毎日の10分休憩での出来事だった。俺達は一つの小さなイスにいつも大人数で座ろうとする。しかし、イスに座れるのは4人程度、15人なんて到底座れそうにもなかった。だが、人の上に人が座り、どんなに狭くてもいつも15人で座っていた。当時はたまに何やつてんだろ、と自分でも思うこともあつた。それも今となつてはいい思い出だ。笑い死にの刑などと言って、とつ捕まえ、イスに座らせて脇をこちょばしたりして遊んでいたこともあつた。教室中、いや階全体に聞こえるくらいの大きな声で笑い、悲鳴をあげ遊んでいたり、調子に乗りすぎて怒られたこともある。先生に一番きつく怒られたのは、いつだっただろうか。それすらも分からない程、何回も怒られていたような気がする。

他人から見ればとてもつまらないこと。それをとても楽しめる俺達は幸せだったと思う。誰よりも笑い、誰よりも楽しんだ中学校生活だったような気がする。そんな楽しんだ中学校生活でも喧嘩をしたことも何度もあつた。一番友人を怒らせてしまった出来事は今でもはっきり覚えている。

恐らく中2の秋だった気がする。その頃、真は俺達とも仲の良かった佐々木愛美という女子と付き合っていた。愛美は天然で、元氣

すぎるところもあったが、ピュアで可愛かった。そんな二人のことがみんな気になって、二人が一緒に帰るところを尾行したことがある。学校をでて、二人は近くの店にはいつていった。そこで一緒にご飯を食べるつもりだったのだろう。俺達は二人が並んでいる写真を得るため、近寄って携帯でツーショットを撮ろうとした。しかし、撮る直前に真が立ち上がった。

「ばれたんじゃないか？」

「そんな訳ないだろ。」

と不安になりつつも見ていると、

「トイレしてくるわ。」

と言って、真がこっちに歩いてきたすぐ近くにいてはバレてしまうと思い、席を立ち離れていった。それでも、すでに遅かった。店に入った時点で気づいてしまっていたらしい。

「お前らふざけんなよ。」

「ごめん。」

「そんなことして何が楽しいんだよ。」

「俺達の勝手だろ。」

友人の一人がつい口をすべらせてしまった。

「何が勝手だ！？勝手だというなら一切迷惑かけねえのかよ？」

「かけてねえだろ。」

一度突つかかってしまって、もう引くことはできなかった。

「かけてねえだと？お前らがいる時点で俺にとっては迷惑なんだよ！」

「そんなのしらねえよ。」

「謝れや！して帰れ！」

「分かった。ごめん。」

謝るタイミングを与えてもらえただけ良かっただろう。でも、何か気に入らなかったらしい。

「なんで、こんなことしたんだよ。」

「それは・・・まあ・・・。」

吉野は答えようとしたが、いい言い訳がでてこなかったらしい。

「早く言えや！」

「分かったよ。言ってやるよ。俺あいつのこと好きなんだよ。」

「・・・。」

「笑えばいいさ。俺はもうしらねえ。」

「ごめんな。」その後は自然と仲直りしていった。

やりすぎてしまったりすることもあった。しかし、遊びの中で喧嘩になることはそうそうなかった。これもいいとこだったと思う。いつの間にか先生にも怒られなくなる、そんな日々が3年の時にやってきていた。

冬のある日、他クラスの友人も誘い、15人で休み時間外にでた。午前中は雨で雪が溶け、グラウンドは水溜まりだらけ。そんなことにせずには遊んでいた。転んだら最悪だよな。そんなことを話しながら、ぶつかりあった。今考えると、この遠慮のない行動が失敗だった。吉澤はぶつられたまま転び、水溜まりに倒れ込んだ。被害者となった吉澤、加害者となってしまった淳希。被害者と加害者になった二人以外の人にはその場に点が見えていたかもしれない。何も言えぬまま見ると、被害者はビショビショ。下着まですべて濡れていた。学校に入ってジャージになる。怒られるだろうな、と思っっている俺達。一人、吉澤が怒っているだろうなと思っっている淳希。しかし、先生に説明してみると、一切怒られず、笑われるだけだった。吉澤も怒っている様子はなく、全く気にしていないようにも見えた。こんな事件も楽しい思い出になっているのが不思議だった。そんな楽しい日々もあったという間に過ぎ、卒業式を向かえた。2、3時間静かにしているのは辛いものだったのだが、終わった後に遊ぶことを考えていれば、案外時間が短く感じた。終わった後、遊びにラウンドワンに行った。男子だけでも40人はいたのだろうか。それでも、15人でずっと固まって、遊び続けた。これが中学生

最後の思い出だった。

過去（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。
是非、アドバイスお願いします。
今後に活かしたいと思います。

夢

そして、同窓会の日がきた。会場に行くとたくさん同級生がいて、その中に特に仲の良かった友人が13人いたが残りの1人はいなかった。話を聞くと、仕事場が海外で戻ってくることができなかったそうだ。思い出の15人ではないのが残念だが、思い出の14人で思い出話や仕事の話をした。にしつpegあのが有名企業の社長だったというのは驚きだった。話をしていくうちに昔の話を思い出してしまった。

「そういえばさ、昔考えてたゲーム作ってみた？」冗談で聞いたその言葉がすべての引き金となった。

中2の冬、席替えで仲の良かった男子で同じクラスだった8人の内、7人がすぐ近くになった。授業中、離れてしまった一人は急に真面目になったのだが、俺達は予想通りうるさくなってしまった。そして、ある日、授業中にゲームの話が始まった。

「ねえ、クールオブビュートイっていうゲームやりたくない？」突然始まるさくちゃんの話。

「何それ。」

ゲームの好きな水本はすぐに食いついた。

「暑いところでどれだけクールに踊れるかっていうゲーム。」

「クソゲーだな。」

吉澤が言った。

「あれじゃね？むさ苦しい中年太りの親父が主人公とか。」

「体力制とかもいいかもな。」

「それいいな。クールに踊る程体力減って、激しく踊ったら回復とか。」

「激熱ドリンク飲んで、回復もいいかもな。」

「Wi-Fiで通信対戦とかは？」

「ゲーム機絞られるから一機で多人数対戦の方がいいだろ。」

「そうだな。他に何かステージ作るとかできるんじゃない。」

「クソゲーだけど、ちよつとやりてえ。」

「でもゲーム機どーすんの。」

「PSPとか？」

「いや、クールゲーム会社作って活気的なゲーム機開発だろ。」

「売り始めたら速攻バカ売れだろうな。」

「最終的には大会だろ。」

「日本大会？」

「世界大会に決まってるだろ。」

「絶対すげープレイヤーでてくんだらうな。」

「そういえばさ、昔考えてたゲーム作ってみた？」

「そんな話もあつたかもなあ。」「なつかしいなあ。」

「あれがあつたら本当にやってみたいんだけどな。」

「俺も今でもそう思ってるよ。」

「まじか。俺もだ。」

「売ったら人気でるんじゃない？」

「お前、昔のまんまだな。」

「どういうこと？」

「そんな簡単に売れる訳ねえだろってことだろ。」

「そうそう。」

「でもさ、作るだけ作ってみたくね？」

「俺達で作れるようなもんじゃねえだろ。なあしんちゃん。」

「何だよ。作れとでも言ってるのか？」

「そういうことだよ。」

「いいだろ。二人で作ろうぜ。」

「さくちゃんまで何言ってるんだよ。いくらかかるか分かるだろ。」

「資金はにっぺ持ちで。」

「ちよつ……。」

「それならいいな。一緒に作るか。」

「よっしゃ、やったるー。」

「ところでさ、昔言ってたレジャーパークもやってみねえ？」

これも中2の冬の出来事。

「レジャーパーク作りてえ。」

「いきなりなんだ。」

「いや、楽しい遊び場ほしーなと思って。」

「俺、理想のレジャーパークある。」

「まじか。気になる。」

「あんね、普段はそこのレジャーパークよりつまらんだの場所
なんだけど一週間に一回イベントあってな、朝から夜まで好きなだ
け3000円で遊べんの。」

「そういう場所いいな。」

「3000円っていう安さがまたいいな。」

「イベントも毎週違うとかな。」

「逃走中みたいなのできたらな。」

「やりたいな。宝探しとかも男の夢だよな。」

「そうだな。一日中宝を求めて大冒険。死ぬまでにやりたいことの
一つだろ。」

「死ぬまでのこともう考えてんのかよ。」

「中はさ、自然ゾーンと建物ゾーンに分けたら面白くなりそうじゃ
ね？」

「建物ゾーンは一個に全部つながってるけど、グネグネな道とか。」

「自然ゾーンさ、擬似砂漠とか、山に洞窟とか楽しそうじゃない
？」

「そういうのいいな。逃走中だったら、逃げ場と隠れ場多くて楽
しそう。」

「宝探しするにしても、古い建物で地図を見つけて、地図の暗号を
解きながら、いろんな自然を冒険するのが理想だしな。」

「いろんなポイントで試練作ったりマジ楽しそうだな。」

「イベント何回行っても楽しそうだな。」

「普段も客が来るような場所にしたら、大ヒットだろ。」

「普段は常連客の謎解きパーティーとか開いてみたいな。」

「いいねえ。」

「誰か作れよつ。」

「ところでさ、昔言ってたレジャーパークもやってみねえ？」

「授業中に話したって言ってたやつか？」

「そうだよ。」

「でも、資産が足りないだろ。」

「そうだよな。」

「俺達もいつまでもガキでいられないよな。」

「大金が絡んでくると遊びではできないよな。」

「そんな楽しめる程の土地手に入れようとしたら、数十億かかるんじゃないか？」

「そうだよな。」

「でもさ、この14人で協力して、レジャーパークも作ろうぜ！」

「これだけは冗談では進められないよな。」

「でもさ、楽しめる場所って大事じゃん。」

「それもそうだけど・・・。」

「やってみても、凄く大変だと思うよ。資金が足りないし、住んでるとこ全然違うから構想の段階で疲れきっちゃうよ。」

「でもな・・・。」

「じゃあみんな俺の家来いよ。一人なのに家無駄にデカいしさ。」

「軽く自慢か・・・？」

「いいだろう。」

「本当に作るかはもつと時間かけて相談しよう。」

「それは分かってる。」

同窓会で他にもたくさん人がいたが、俺達14人は子供の頃と変わ

らず、盛り上がっていた。ノリが変わっていると思われることは多いが、これが俺達だ。結果的に同窓会終了後全員で西浦の家に集まり、ゲームとレジャーパークを作るための相談をすることになった。昔の14人でまた楽しめるな！」

「なんか楽しそうだね。」

そこに仲の良かった女子が話に入ってきた。

「そりやそうだろ。」

「昔みたいにまた楽しめるんだからな。」

私も一緒にやりたいな。教室でレジャーパークの話聞いてる時凄く楽しそうだって思ってたんだ。」

「どうする？」

「男子だけでやった方が楽しそうだけど、男目線だけで作ってもなあ……。」

「じゃあ私もいれて。」

「作るのはだめだけど、アイデアだしたりそういう時だけならいいよ。」

「それでもいいかな。」

愛美と笑は人とは違う目線で物事を見ていたりして、アイデアに長けていることもあり、結果16人で作るようになった。

計画

同窓会が終わり、すでに夜12時と遅かったためにしつぺの家には男子だけで行った。社長とは知っていたので、家は大きいのだろうな、と想像はしていたが、そこまで大きい訳ではなく俺の家と同じくらいだ。みんなでそっちに入ろうとすると、

「そこ俺の実験室だから入るな。」

と、とめられてしまった。話を聞けば、様々な素材や形状でどれが一番適切かを確かめるためだけに作られた建物だそう。そこには最近一ヶ月は入ってないそうだが、大事な資料などもたまっているらしく入られたくないそう。

そこから少し進むと今度は本当に大きい城のような家がでてきた。自分の家の5倍はあるだろう。3階建てだったが、土地が広くこれこそ金持ちというような家だった。そこに入るといくつもの部屋があり、その中のひとつで話し合いが始まった。

「まず部屋は二人で一つになるかもしれないけどそれでも大丈夫か？」

「二人で一つ!？」

「だめだったか？」

「いや。部屋7個もあるのか。」

「リビングとかプールとかあるから実際はもっと多いけどな。」

「冗談の自慢でも心折れるからやめてくれ。」

自慢は冗談でしていたが、部屋の数などはまったく冗談ではなく、30個の部屋とプール、大浴場のような風呂場に映画を見るだけのための部屋など想像できない程の数の部屋があるらしい。

「でさ、ゲームとレジャーパークどうすんだ。」

「ゲームは作るっていう前提で話を進めてもいいのか？」

「それはな。」

「まあ、まずレジャーパーク作るのか？」

「俺は作りたいな。みんな家族いないんだからさ。こういう大きな計画もいいんじゃない？」

「失敗して、借金まみれになったらどうすんだよ。」

「待つてる人もいないし、海外に逃げようよ。」

「冗談で話してんじゃねえよ。」

「冗談じゃないって。」

「でも、俺達いなくなっても家族に迷惑が、とかないからなあ。」

「なんか悲しくなってきた。」

「おっしや、楽しんでやる。」

「作るかつ。」

「やってみるべ。」

その後もたくさん話をし、まずゲームの製作からかかることにした。その間残りのメンバーは資産稼ぎ。それが一番いい流れな気もしなくはなかった。そして、二人の女子はゲームが完成するまでは家に呼ばないことにした。

翌日からゲームの計画が始まった。

「ゲームの名前はクールオブビューティー。これは変えないで作ろう。」

「懐かしい名前だな。」

「ネーミングセンスない気もするけどな。」

「思い出の作品みたいでいいじゃねえか。」

「ゲーム内容も大体は昔考えたやつでいいんじゃないか？」

「クソゲーのまま売り出すのか。」

「操作方法を考えて画期的なゲームにすればいいと思うよ。」

「それもそうか。」

「それは後でじっくり考えよ。」

「そうするか。じゃあまず、キャラはどうする？」

「初期は昔考えたやつで、ステータジクリアしていく間に仲間が増えて、選択可能とかがいいんじゃないか？」

「むさ苦しいおっさんで始まるのかー。」

「変わったゲームだな。」

「変わりすぎだろ。」

「まあそれがいいんだろうな。」

「ゲーム内アイテムは？」

「激熱ドリンクとかクールじゃなくなる回復アイテムとエアコンみたいな涼しくなるアイテムもいいんじゃない？」

「それでいいか。細かいアイテムはまた考えよう。」

「ステータジは暑いとこ？」

「少しずつ暑くしていったんクールに踊りにくくするとか。」

「

「それ良さそうだな。」

「次のステージに進む条件は？」

「ダンスにポイント付くようにして、一定ポイント超えるダンスをしたら次のステージ行けばいいんじゃないか。」

「なんとなく見えてきたな。作ってって悩むとこできたら、また相談するわ。」

「OK。」

大人になったから、というのとゲーム作りは遊びだから、という考えで少してきとうに考えている気がするが、本来もつとじっくり悩まないといけないような気もする。

「ちょっと待て。ゲーム機の相談忘れたままじゃないか？」

「重要なこと忘れてたな。」

「俺の理想としては手足頭胴にセンサーつけて自分が動いたのに反応するとか楽しそうだと思うけどな。」「動くのが苦手な人はできないってか？」

「そうだなあ。コントローラー式とセンサー式両方作るってのどうだ。」

「作れなくもないけど、価格が高くなるよな。」

「昔言ってた大会やるんなら幅広い人に楽しんでもらいたいから価格も高すぎると困るよな。」

「そんなに売れないだろうから大会無理だろ。」

「まあそれはいいとしてさ。」

「本体とコントローラーで売り出して、別売りでセンサーでいいんじゃないか？」

「センサーと本体はどうやってつなぐんだ??」

「それなら俺達でなんとか動きを電気信号にして、キャラにも同じ動きさせるように作ってみるよ。」

「俺もやんのか。」

「お前もゲーム作ってんだろ。頑張れよ。」

さくちゃんとしんちゃんが仕切っていたゲームの相談はある程度決まってきた。そこで一度ゲーム作りを始めることにした。実際ゲームを作るのはさくちゃんとしんちゃんなので、残りの12人は何もすることがなかった。しかし、初日ということで役割分担などをする必要があるのだ、今日は全員仕事を休んだ。そして、明日からあに以外の11人は仕事に戻り、フリーターのあにには洗濯、掃除、炊事、買物をすべてすることになった。

しんちゃんとさくちゃんがゲームを作り進めている間、俺は有川事務所での税理士としての仕事をすすめていた。ゲームのことが頭から消えなかったが、信用をなくすような真似をするわけにはいかな

いのでしつかりと仕事をやっていた。昼の休憩もなく、ぶっ通しで午後5時くらいまで働いた時、ふとあることの確認をしていないことを思い出した。それは総資産だ。これが確かになっていなければ、どこまで大きなことができるかも分からない。ちなみに俺はというと2億程度貯まっていた。この10年間この個人事務所をやっている、ここ5年は休みなどほとんどなく、働いてきた。そのお陰もあって、俺の年収は3000万。今はようやく信頼もついてきて、大きな仕事ももらえるようになってきた。それでも、生活費は月5万円でおさえるようにしている。それでようやくたまった貯金をこういうように使えるのは嬉しいことだと思う。

一日働き終え、家に帰った後全員で資産の確認をすることにした。にしつぺは社長なだけあって、貯金の額は数十億。水本も社長らしく10億程度。吉野は柔道家だけでなく、TV出演などもしていたらしく水本と同じ程度。吉澤、西田、きつく、淳希も俺より少し多くたまっていた。残りの5人も俺よりは少し少ないものも5000万以上は貯金が多まっていた。しかし、フリーターだったあにだけは貯金額が5万と少しという程度で少し足をひっぱっているような気もしたが、それは仕方がなかった。そして14人の合計金額は70億程度になっていた。

「これなら十分色々と作れそうじゃないか？」

「土地買ったり、建物たてたり、宣伝したり、それに維持費とかもかかるだろうし、税金もたくさんとられるだろうからなあ……。」

「これで足りないとか一大事だろ。」

「こうなりやゲームを本気で作るしかないんじゃないか？」

「それなんだけだよ……。」

「ん？どうした。」

「二ヶ月くらいはかかると思うよ。」

「まじかよ。」

「まあそんなくらいかかると思ってたよ。」

俺達の夢の計画はまだまだ完結しそうにはなかった。しかし、これは長くなることは分かっていた。これからも気長にやっていたい。

完成

それから2ヶ月という充実した日々があつという間に過ぎた。

「そういえば、ゲーム作りだいぶ進んだ。」

「あとどんくらいだ？」

「カセットの方はもう完成したんだけど、まだバグとかが見つかるかもしれないからなんともいえないな。」

「ゲーム機はどんくらい進んだ？」

「それは後でさくちゃんに聞いてみてくれ。」

「分かった。」

「じゃあ続きやってくるわ。」

「頑張れ。」

そして、しんちゃんが部屋に入ったのとすれ違うように今度はさくちゃんが部屋から出てきた。二人とも同じような疲れきった顔をしている。夜は本当に寝ているのだろうか、少し心配になる。

「さくちゃん、ゲーム機の方進んでる？」

「前作ったことあるやつ参考にして作ったんだけど、センサーが難しいな。」

「やっぱりか。」

「ああ。できたんだけど、コードをつけると動きにくいことが分かってなあ。」

「一応できたのか。さすがだな。」

「まあな。頑張ったんだよ。」

褒められて、少し照れているさくちゃん。努力を認めてもらえて嬉しかったみたいだ。

「それで、ワイヤレスにするのか？」

「それも考えたんだけど、近くで同時プレイできなくなるんだよな。」

「なんでだ？」

「たまに信号が混ざっちゃうことがあるんだ。」

「チャネルみたいな感じできないのか？」「どういうことだ？」

「A、B、Cを選ぶようにして違うのだったら混ざらないとかよ。」

「それをやっても技術のせいかたまに混ざっちゃうって話だ。」

「そうだったのか。ごめん。」

「まあ分らないよな。」

「詳しくないからな。」

「ちなみに今は外付けのカメラを作ってみてる。」

「そうか。それで完全に認識できるようになったらセンサーの代わりで完成ってことか？」

「それはないな。プレイしてみたら、バグとかがいっぱい見つかるからまだ2週間はかかる。」

「そっか。まあ頑張れ。」

さくちゃんはさつき見たのと同じような姿で部屋に戻っていった。

そこから2週間。ついにゲームは完成した。しかし、二人で隅々の細かいバグまで処理したそうだが、まだ残っているかもしれないということ。今夜はクールオブビューティー大会が始まった。最初はい言い出しっぺの俺がやることになった。操作方法は当然外付けのカメラ、素晴らしいダンスを披露してやる。曲が流れ始めた。最初のステージだからか、場所は普通の部屋。音楽も激しいような曲調ではなかった。自分が思い付く限りのダンスを繰り広げた。そして、点数発表。ジャカジャカジャカジャンツ！表記ものは50/100という数字。それと一緒に短い文が添えられていた。

『あなたのダンスは独特でした。動きが固いのが残念です。』

「50点のダンス！」と、みんなからバカにされてしまった。それよりも表記されるのが、点数だけでないということに驚いた。そして、次はあにいの番だ。俺がクリア出来なかったステージを再チャレンジすることになった。踊りが始まった。あにいはダンサー志望だったけどもあつて、なめらかでどこか優雅な雰囲気を出しながら、最後まで踊り続けた。

『98/100・すばらしい。このゲームの王者かもしれません。』

みんなは俺の時とは全然違い、やはり「すげえ。」などと声が上がっていた。

「ところでしんちゃん、コメントは何通りくらいあるの？」

俺も気になっていたことを先に淳希が質問してくれた。

「200通りくらいあつて、その中から大体の動きと点数からコメントを選ぶようになってる。」

「へー。200か。ちなみに一番高いコメントは？」

「教えねえーよ。お前らが出したらその時に言つてやるよ。」

「いいじゃねーかよ。まあそれも楽しいか。」

その後もゲームを1時間くらいやり続けた。そしてもうやめようと言っていた最後の一回。不可解な動きをしていたまっとながついに100点をだした。

「おおー！ すげえ。」

「このコメントが一番上か？出してやったぞ。」

まっとうが勝ち誇る。

「残念ながら、これは二番目だぞ。仕方ないから教えるが、一番は『もうこのゲームやめてくれっ。』なんだよ。」

「くそっ。満点でもだめだったか。」

「100点の上に120点ってのが一個あるんだよ。」

1時間やり終えて、結局バグは見つかることがなかった。強いていうなら、まっとうのダンスが100点を叩き出してしまったということだろう。

「そういえばさ、パッケージ二人で決めてみたんだけど、これでもいいかな。」

「作ってる二人とは言え、みんなに相談しろよ。」

「ごめんな。」

「まあそれはいいけど、このパッケージだと印象に残らないんじゃないか？」

「そうかな。」

「背景の写真はいいとして、文字が目立たないよな。」

「てか、どうせならもっと燃えそうなくらい熱い写真にしようよ。」

「クールに踊るって意味で涼しそうな写真選んだんだけどな。」

「じゃあそのままの写真で文字を燃えたがる炎みたいな感じにすればいいんじゃないね。」

「そうするか。」

「それよりさ、値段どうするの？」

「制作費的には、本体とコントローラーとカセットで2万5000円、カメラは3000円ってとこがいいと思うな。」

「まあ俺達には良く分らないし、別にいいんじゃないか？」

「じゃあこの価格で売り出すよ。」

「てか初回限定セットで4点で2万5000円を50個売らない？」

結果的に最初は4点2万円で30個売り出すことになった。それからは本体とカセット+コントローラーorカメラで2万5千円。コントローラーとカメラを別で買うなら3000円ということになった。

価格が決まり、いよいよ各店に並べてもらえるようお願いしていく日がきた。事前に連絡はしていたが、実際に来てもらってから決めると言われ、今日は分担して5店舗を回る。俺はきつくと二人で実物を持って、店に行った。

「こんにちわー。以前電話した者ですが。」

「ああ。あの人ね。」

「ゲームが完成したんで持ってきました。」

「それなんだけどね、店長に相談したら知らない会社のゲームはいらないと言われてね。」

「無理になったってことですか？」

「ごめんね。でもそちらの会社名前広まってないでしょ？ なんて言つの？」

会社名・・・そんなもの決まっていなかった。すんなり受け取って並べてくれると少し思ってしまったことからの油断の表れだっただろうか。

「ク・クールゲーム会社です！」

……。やってしまった。昔みんなで考えていたゲーム会社をきとうに言ってしまった。何たるミスだろう。

「そうかい。やっぱり聞いたことないねえ。」

「はい……。では、さようなら。」

ゲームを並べてもらえない上に、仮想のゲーム会社名を名乗ってしまうなんて最悪の失敗だ、そう思っていた。

「ごめん。ゲーム置いてもらえなかった。」

置いてもらえなかったのは俺だけじゃなかったんだ、そう思うと心が楽になったような気がした。

「実は俺もなんだ。」

「俺らもだよ。」

「俺らも。」

結果的にみんな置いてもらえなかったらしい。しかし、俺には仮想のゲーム会社を名乗るというもう一つのミスがあった。

「あのさ……。実は……。」

「そいえば、ゲーム会社勝手にクールゲーム会社にしちゃった。」

俺が話そうとしたその時だった。日ごろ、ミスの少ない工藤も俺と同じ失態を犯していた。しかし、誰も文句は言わず、そのまま『クールゲーム会社』となっていた。自分の中だけでの問題は解決したのだが、ゲームを売るという問題はまったく解決していなかった。どの店舗でも取り扱ってもらえずどうするんだ。

解決と問題

どの店にも置いてもらえず、俺達は極地に追い詰められていた。何か案を見つけ、なんとか売り出せるようにしていかなくてはいけない。

「どうする？」

「どの店でも扱ってもらえないとかどうすればいいだろうな。」

「工藤の店で売り出すってのは？」

「それいいかもな。」

「自営業だし、売ろうと思えば何でも売れるけど買う人いないと思うよ。」

「そっか。」

「このゲームの存在と面白さを一番手っ取り早く伝える方法か……。」

「お店で一台プレイできるようにするとかどうだ？」

「それいいかもな。」

「長時間プレイ禁止にしてさ。」

「それでもやる人とかいたら大変じゃない？」

「それに店でカメラ機能なんて使ったら正常にプレイできないよね。」

「コントローラー限定だと面白さ伝わらないよな。」

「『カメラ機能はこれより10倍楽しい！』みたいな言葉と一緒に書いてみたらいいかもよ。」

「まあやるだけやってみるか。」

その日から早速、工藤電気にはこのゲームが置かれ始めた。しかし、それから一週間と経過してもそれをやってみる人どころか、見ている人すらほとんどいなかった。そこで、日本みんなに知っても

らうためにネットという手段を利用することにした。クールオブビューティーの紹介文とプレイ動画この二つをのせてみた、ただそれだけだった。初日の閲覧数は2人だけだった。そのうち一人が「このゲームやってるのみるだけでも面白いんで、やったら本当に楽しいんでしょね。」という置き土産をくれただけでも良かったということにする。そして、5日・・いや4日目にはその人数は劇的な変化をとげた。2人から50人くらいまでに増えていたのだ。おそらく、この電脳世界。口コミが噂を巻き起こし、ついにはそれが話題を連れてきてくれたのだろう。さらに変化はそれだけではなかった。工藤電気でやれるということが書いてあり、次の日から一日2、3人であるが、来てくれるようになってきた。そして、その姿を見てどんどん客は増えてきていった。

そこで明日10時から30セットの初回限定版を売り出すと、言ってみると朝10時から待っている人がしつかりと1人いてくれた。いないかと思っていたので、凄く嬉しいことだった。それからも少しずつ客がきて、最終的に1時で完売した。

自分達が子供の頃想像した『クールオブビューティー』が本当に売られだしてしまったのだ。今、思えばちょっとした遊び心で成功し、浮かれてしまっていたのかもしれない。

それからこのゲームは珍しいということでも少しずつ大きな話題になっていき、通常版も売れ始め、ついには他の店舗でも扱ってもらうことができ、ひとまずゲーム売り出し計画は完了した。そして、次はレジャーランドの計画に進んだ。

「さあ、レジャーパークどうする。」

「まず土地だよな。」

「狭かったらつままないしなあ。」

「俺たち全員の貯金一部とゲームで稼いだ金で買ったらどんくらいになるかなあ。」

「ゲームでいくら稼げるかによるんじゃないね。」

「建物とかの建設費、維持費も考えないと。」

「なんかそんなに大きい土地買えそうにないよなあ。」

「それさ、一個方法思い付いたんだけど、俺たちの家ってあれいるのか？」

「お前まさかここに住み続ける気？」

「あれ違った？」

「まあいいけどよ。」

「さっすが。」

「家いらなくなるなら売るか？」

「なんかもつたいねえなあ。」

「俺んちより立派だから問題ないし。」

「もつと便利な使い方ないんかな。」

「自分たちの欲しい土地にいる人に引っ越してもらうってのは？」

「難しいんじゃないか？」

「引っ越しても利益ないからなあ。」

「じゃあ100万で引っ越してもらうとかならいいんじゃないか？」

「それならできそうだな。」

「でもどこに作る？」

「ここから近いとこがいいよな。」

「この家の後ろにある山とその奥にある住宅地買い取ればそこそこ大きくなりそうだけだな。」

「あの山だけでもお前の持つてる敷地よりあるだろ」

「山ってあれか？」

「そうだけ。」

「それなら俺んちの一部だよ。」

「はあ！？ やっぱり俺たちとは違うな。」

「その山をレジャーパークの一部にしたらだめか？」

「楽しくなりそうだし、全然いいよ。」

「それならあとは住宅地だよな。」

「調べてみたけどあそこなら50軒がいくらいだと思う。」

「50っていくらかんだよ。」

「空き地が10軒だから交渉しだいでは安値でいけるだろ。」

「お前の安値は間違いなく高いぞ。」

「あとは一人一軒で14軒買うだろ。して女子二人で一軒買っても
例えば残り25軒でゲームで20軒分稼いだら残り5軒だな。」

「家一軒買う大変さが分かってないな。」

「それにゲームでいくらか稼ぐ計算が分からんけどなんかすごいよな。」

「残りの5軒は？」

「そこが悩みなんだよな。」

「とにかく今は45軒買ってみないか。」

「じゃあ、まずは空き地から買うか。」

「その前に子供達のためにレジャーパークを作るということを地域
の方々に伝えた方がいいんじゃないか？」

そして一軒ずつに家を売ってもいいか、というアンケート用紙を
持つて行くことにした。結果は50軒中49軒は売ってもいいと書
いていた。しかし、残りの一軒が思い出の場所だから売りたくない
という返答だった。さらに悪いことはまだ終わらなかった。その家
は山に一番近い所に並んでいたためそこがなければ、レジャーパー
クを作り進めることができなかったのだ。そこはなくてはいけない
ところだった。だから、何度も何度も言ってみたが、返事はNO。
そのせいで、そこにレジャーパークを作るのはできなくなってしまう
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9533y/>

過去の夢の計画

2011年12月3日18時54分発行